古田先生と異文研

久　米　昭　元

先生には、15, 6 年前、東京のある会合で初めてお会いした。すらっとした出で立ちで、話し方にメリハリのある方と思った。講談社で百科事典の編纂をほぼ終えられた頃であった。当時私は神戸外大におり、ミネソタ大学のハウエル教授の対人コミュニケーションの本を訳出したく思っていたので、次の機会に上京した際、講談社に電話したところ、先生が出られた。一度お会いしただけで、いきなり私事で電話する無謀さに今更ながら冷や汗が出る。そんな私に、大修館書店の優秀な編集者を紹介して頂き、最終的には、ハウエル教授との共著が出た。先生に電話したお陰で小生の夢が実現した。

先生の専門はご自身では西洋神学・哲学とされているが、異文化コミュニケーション関連のものも沢山書かれており、その全貌は私のような浅学非才の身には推し量れない。異文化コミュニケーションについては 1980 年代初頭、I.C.U. のスチュワート教授との出会いが決定的だった由。先生は、これこそ、将来の日本に不可欠の研究及び教育分野になると確信された。そんな折り、佐野学園の大学設置準備室から、大学づくりに手を貸して欲しい旨の強い要請があった。先生は、これからは、異文化コミュニケーション能力に長けた人を育成する事が大切と考え、そのようなアイディアを提唱されたところ学園側も賛同し、企画に参画された。しかし、いかんせん、先生の考えは、10 年早すぎた。文部省は、コミュニケーションといったカタカナのつく学部や学科は認めなかった。先生は将来を見据えて、学園内に異文化コミュニケーション研究所(異文研)を発足させた。

1987 年、新しい大学は幕張に外語大学として発足し、同時に研究所も大学に移転した。異文研所長職以外に、一般教育主任も担当され、獅子奮迅の活躍をされていた。小生が参画したのは、大学設立後 4 年目であっ

た。先生は神戸にも何度か足を運ばれ、学問や大学の将来など、とうとうと夢を語られ、いつの間にかその語りの世界に惹かれてしまい、気がつくと「箱根越え」をしていた。

私が就任した当時、異文研は既に紀要・ニューズレターの発行、図書収集、講演会等多彩な活動をしていた。中でも先生は、紀要『異文化コミュニケーション研究』の発行を、研究所の顔として、最も力を注がれた。投稿者は、当大学に限ることなく、広く門戸を開放し、査読制度を実施し、毎号、特集として3編程度を揃えた。このような努力を毎年繰り返された。そのためか、現在では寄稿者数も増加して競争が激化し、紀要の質は高いと言われるようになった。1988年に創刊号が出た時は、日本社会のタブーを破るがごとく、画期的であった。ある年、先生が寄稿を依頼した方に、原稿内容について遠慮なく意見をされ、その方は怒って辞退した。先生は、「仕方ありません」と一言だけ言われた。ニューズレターは、時代を一歩リードし、役に立ち、考えさせられる情報誌を目指したが、先生は最終稿の一字一句まで目を光らせておられた。これで良しと思って念のためにお見せすると訂正個所がいくつも出てきた。長年培われたエディターシップが遺憾なく発揮された。

東京での講演会シリーズでは、先生の司会振りはいつも印象的だった。講師の履歴だけではなく、著書などを前もって必ず読み、わずか数分の紹介にも、その講師の人となりを的確に聴衆に伝えるよう努められた。質疑応答のさばき方も見事で、質問がない時は、自ら質問し、講師との忌憚のないやりとりは圧巻であった。まさに、余人をもって代え難しであった。

ある時、研究所内で、これからお互いに先生という呼称はやめて「さん付け」で呼び合いましょうと提唱された。こちらは、「はい、わかりました、先生」といって、結局誰も「古田さん」とは呼べなかった。数年前、東京から鎌倉に突然引っ越しをされた後、重い病気になり入院された。それは、私には、十数年に亘って大学内外での激動の日々が続いた所から来る神の休止命令だと思えた。その後、奇跡の回復を果たされた。退官後は、大学の学術顧問として、さらに広い立場からアドバイスを頂けることが楽しみである。